2. ダム建設問題と環境運動の展開

・反ダム開発運動（社会運動）の展開とその区分

表 2-1　各時期の運動の類型と特徴

	運動の類型	担い手	志向性（争点）	フレーミング	代表例
第 1 期（昭和初期～1950年代）	生活保全運動（作為要求型）	立地点の住民や自治体	補償の充実	生活再建のための十分な補償を	佐久間ダム，花山ダムなど
	自然保護運動	都市部の研究者や文化人，行政関係者	学術的に貴重な自然環境の保存	比類なき自然景観	尾瀬保存期成同盟
第 2 期（60 年代～80年代半ば）	地域完結型（作為阻止型と作為要求型の混在）	立地点の住民（運動によっては）地区労など労組や革新系政党，研究者，弁護士	計画の妥当性や公共性への疑義，権利防衛	先祖伝来の土地を守れ 基本的人権・地方自治の尊重 ダムができる村は滅びる	下筌ダム，矢田ダムなど多数
			補償の充実	ダム建設は銭次第	苫田ダム
第 3 期（80 年代後半～）	ネットワーク型，流域連携型（多様な運動の合流）	立地点の住民（運動が衰退・消滅した地域もある），都市部や下流部など他地域のアクター（環境NPO，研究者・専門家，文化人，一般市民など）	計画の科学的妥当性とリスク，自然環境の保護，多様なメディアを通じた市民的公共圏の形成	無駄な公共事業 ダムはムダ ダム建設の時代は終わった 最後の清流を守れ	長良川河口堰 川辺川ダム
第 4 期（90 年代後半～）	オルターナティブ志向型（地域環境やコミュニティの再生・創造）		オルターナティブの提示と実践（治水・利水の代替案作成，植林活動，公共事業に頼らないむらづくりなど），自己決定	森は海の恋人 緑のダム 大事なことはみんなで決める	新月ダム 細川内ダム 吉野川第十堰

事例　細川内ダム建設問題――徳島県木頭村の闘いと模索

・木頭村と細川内ダム計画

村の面積の 98%が山林

人口 1,843 人（2000 年国勢調査）、高齢化率 33.9%

村内の高校は那賀高校木頭分校があるのみ

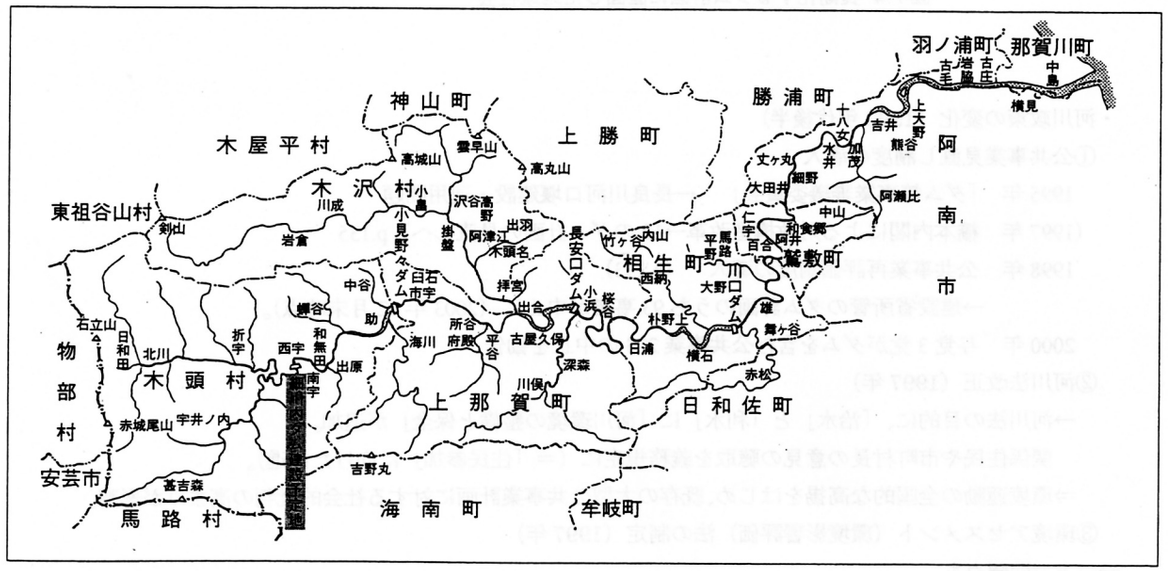

図 8-1　木頭村と細川内ダム建設予定地

（出典）木頭村（1995）。

・那賀川総合開発計画とダム建設

	長安口ダム	川口ダム	小見野々ダム	細川内ダム（計画）	追立ダム	大美谷ダム
河川	那賀川	那賀川	那賀川	那賀川	坂州木頭川	大美谷川
立地点	上那賀町	相生町	木頭村	木頭村	木沢村	木沢村
河口からの距離	65km	45km	80km	95km	—	—
実施計画調査着手	1950 年	1956 年	1965 年	1972 年	不明	1958 年
竣工	1956 年	1961 年	1968 年	—	1954 年	1960 年
主な目的	洪水調節・発電・灌漑	発電・逆調整	発電	洪水調節・上水道・工業用水	砂防・発電	発電
形式	重力式コンクリート	重力式コンクリート	アーチ式	重力式コンクリート	重力式コンクリート	アーチ式
堤高	85.5m	30.0m	62.5m	105.5m	29.5m	31.5m
湛水面積	2.2 平方 km	0.9 平方 km	0.9 平方 km	2.0 平方 km	0.1 平方 km	0.1 平方 km
有効貯水量	4,350 万 t	950 万 t	1,142 万 t	5,300 万 t	不明	31 万 t
洪水調整量	500t/s	—	—	2,400t/s	—	—
計画堆砂量（1994 年時点）	529 万 t (1,080 万 t)	105 万 t 不明	694 万 t (608 万 t)	1,500 万 t —	不明 (188 万t=総貯水量)	3 万 t 不明
事業主体	徳島県	徳島県	四国電力	建設省	徳島県	四国電力

・運動の展開と拡大

第 1 次運動（1970 年代）＝地域完結型

＝村内のアクターに限定（反対派＝同志会、条件付賛成派＝研究会、県と国の開発計画を受け入れて地域振興を図ろうとする村（村長・議会）

第 2 次運動（1990 年代）＝流域連携型・ネットワーク型へ

＝中央の政治アリーナでの「細川内ダム問題」の構築（「巨大ダム計画と闘う小さな村」）

①首長（村長）と運動団体との連携、強力なリーダーの存在

②マス・メディアを多用した問題構築の戦略

③国会議員や弁護士、市民団体など地域内外の多様なアクターと重層的なネットワークを形成

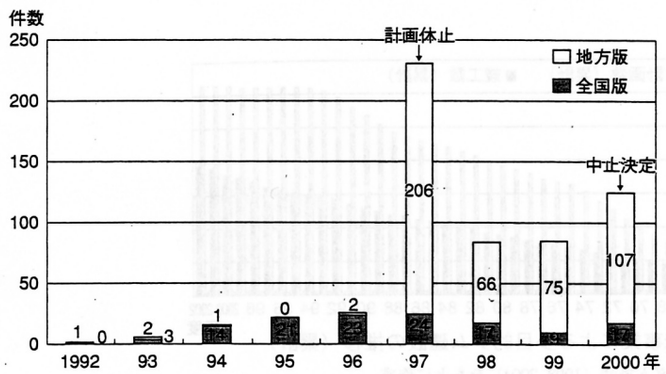

図 8-2　細川内ダムに関する新聞記事件数

（出典）筆者調べ。『朝日新聞』の「細川内ダム」と「木頭村」に関する記事数（見出しおよび本文）。